

揺るがされる距離

有賀千佳の絵の中で、私たちはしばしば庭園や公園にいる。ある時は灌木の枝葉を通して街の灯が見え、ある時は道が見えるような気がする。そして非力さに耐えながら空間を形作り続ける人間の手に気づく。温室がほのかに見える。それがひび割れて植物に覆われる様も。しかしそれらは瑣末なことに過ぎない。何よりもまず、私たちの眼が饗宴にあずかったのだ。

彼女の作品に見られるのは常に「創造」である。しかしそれは、永遠の昔に創造主が造ったものを彼女が描写しているという意味ではない。「被造物」が描かれているのではないのだ。そうではなくて、彼女は描くことによって新たな創造を繰り返す。つまり彼女自身が自らの芸術によって、植物の生命を絶え間なく生み出している「かの力」と化しているのだ。

私たち作品の鑑賞者は、他の惑星からやってきて未知の地をせつせと探索する昆虫に変身したかのようだ。一点透視図法はその動きの中に溶けてしまった。意味がなくなってしまったのだ。

人影のない風景の中で、絵画を鑑賞している者が唯一の人間である。そっと歩き出す。やはり他の人間たちが近くにいたようだ。彼らの住まいが、まるで思い出のなかの島のように、遠くに見える。すると突然花や枝が落ちてきて、注意が近くのものに引き戻される。枝枝が網を投げかける。私たちは黙ってその網にかかる。

またある時は種子の群れにまぎれ、風に乗ってその風景のなかに運ばれる。生命をもたらす営みに加わり、ほとんど植物世界の一部となる。けれど私たちは眼を持った人間だ。束の間眩惑されても、常に距離は置かれている。醒めて再び現実の地に足をつける。

まさにこの距離とその揺らぎに、有賀千佳は注目している。そこから彼女の芸術は確かな力を引き出す。鑑賞する者はたちどころ

に、しかも何度も何度も新たな驚きを与えられる。造形と精神化のバランスを保つのは、彼女には容易なことようだ。具体的な場所が示された作品（「リュージュンで」、「浅草」、「上高地」など）はあるものの、外的な印象を描写することだけが意図されることは決して無い。

それら以外の作品は、特定のモチーフとの結びつきがなく自由に描かれたものである。庭師のように有賀千佳は既成の画面構成を並べ替え、事象の真髄を描くための新しい形を探り出す。

新しい技術、例えば写真の新技术によって、視覚的認識とは世界の単なる鏡像ではなく、身体的に認識された事象と心理的に認識された事象を微妙に平均化したものなのだ、という年来の私たちの確信がさらに深められた。

絵画は単に時を留めるのではない。認識されたものを新たに選別するのだ。絵画が三次元の事象を平面に表現するものであるという事実からも、それは明らかだ。言うに及ばず、眼自体が形象を網膜に投影する際に同じことを行っている。被写体深度を調節するのは脳だ。被写体が近くにあり過ぎるとぼんやりと見え、被写体の輪郭そのものがくっきりしているか否かに関わらず、遠くにある場合はぼやけて見える。その二点の間に立体感が生じるのだ。脳は理解するために、休むことなく様々な事象を分別、判断しなければならない。

しかし時おり三次元の幻が解体し、垂直に立てられた何枚もの画面の層が見えるような気がする。一枚一枚鮮明度が異なる絵の描かれた板ガラスが何枚も立てられていて、そのガラスの層を通して外を眺めているような気がするのだ。はっとして瞬きをする。と次の瞬間、あらゆる平面が再び、より便宜的で柔軟で常識的な立体の中に収まっている。

有賀千佳の絵画には、いつもながらの物の見方が不確かなものに

なる愉しみがある。空気のできた板ガラスは横転し、砕け、台地となり、水の流れに運ばれるカレイのように滑っていく。いくらかは粉々になってしまうが、その他は自然の物となる。葉っぱや花や種やほこりや水滴のような、空から降ることのできるあらゆるものになるのだ。創造物が生きている。命に目醒めた。枝の一本一本が歓声を上げている。

最近の作品では、事象が渦巻く背景に、時として単色の空が広がっている。しかしそれは空っぽの宇宙ではない。色で満たされているのだ。「希望」という色で。

あるいはその空は「一なる者」、「存在」、「万象」なのかもしれない。人間の概念ではとらえられない、危険でもないが善良でもない、ただ常にそこにあるもの。頼むに足りるもの。

ややもすればそこから宗教的な意味が憶測されがちである。しかし有賀千佳の作品の持つ肯定性は、作為的なものではない。絶えず幸福感に満ち、幸福感をもたらせてくれる、たゆまぬ創作活動が実らせたものなのだ。

2019年6月、ケムニッツにて
ハンス・ブリンクマン